

海があつたころ

湾岸を走る高速道路をおりてしばらく国道を走った。国道沿いには松林が続く。一般の道路にでると、目の前にたくさんの高層ビルがあらわれた。「新都心」と呼ばれる地域だ。高層ビルのむこうには、巨大なショッピングモール、多目的ホール、その先には、これから行く野球のスタジアムがある。海沿いに鉄道が走り、沿線には団地が続き、さらに先には、年間三千万人近い人が訪れるテーマパークがある。

ブレーキをふんで、クルマを道の端にとめた。ここは、見覚えのない道のはずだ。だが、頭のなかに、目の前の様子とはまったく違う海岸、遠浅の砂浜と海の景色が浮かび上がっている。

小四の夏休み。友だち数人と連れ立って海に行つては遊ぶ毎日だった。

坂をくだつていくと国道がある。この国道沿いの松林をすぎると、海がひろがっている。見渡す限り遠浅の海岸がつづき、そのさきに白い波がよせている。春にはアサリがたくさんとれ、秋にはハゼが面白いように釣れる。

海水パンツに着がえすると、服や靴を砂浜に放り出して、海にむかって走った。潮のひいた砂浜には、あちらこちらに水たまりができている。水たまりはぬるま湯になっていて、そのなかに小さな海の生きものが動きまわっていた。

小さなダボハゼが泳いでいた。砂に体をうずめるようにして、カレイがひそんでいた。なかでもおもしろいのがイソギンチャクだった。これを見つけると歓声をあげた。水のかで、うすいピンク色のひげのような触手が、ひらひらと動いている。手でさわると、すばやくひげをすぼめる。いつまで見てもあきない、ふしぎな生きものだった。

水たまりにあきてくると、沖のほうに歩いていつて、腰まで水のなかにはいつて遊んだ。「おい！いま、魚が飛んだ」。友だちがさけぶ。「トビウオだ！」。長いヒレを羽のようにひろげて、太陽が反射するまぶしい水面を魚が続けざまに飛んだ。

遊び疲れると砂浜にもどり、寝転んで空を見上げた。真っ青な空に入道雲がわき上がっている。「むこうに、煙突や建物が見えるだろ。あんなの、まえばなかったよな」。一人が遠くを指さしながら言った。かすかに、たくさん煙突や建物が見えた。

「あれは、埋め立てをして、工場が建ったんだよ。そのうち、このあたりも全部埋め立てられて、団地になるだろうって父ちゃんが言っていたよ」。「これから日本はどんどん金持ちになって、だれでもクルマが買えるような国になっていくだろうってさ」。

「じゃあ、海がなくなるのか？ 貝ほりも海水浴もハゼ釣りも、できなくなるのか？」別の一人が怒ったように言った。「金持ちにならなくていい。クルマなんていらない」。

「この海がなくなるなんて、おれは、絶対いやだよ」。

われに返って気が付くと、高層ビル群に灯りがともりだしていた。野球の試合が始まる時間が近づいている。今日は剛速球を投げるピッチャーが先発する日で楽しみな試合だ。もう行かなくてはいけない。

私は、スタジアムに向かうためにクルマのエンジンをかけた。